Zoom Up Tome 2019

Karate

# 千葉良樹

## 第73回国民体育大会 空手道少年男子個人組手準優勝 石川県小松大谷高校3年

**Profile**

2001年３月２日、中田町仲町生まれ。佐沼中卒業後、石川県の空手の名門小松大谷高に進学する。小学生時代から各種全国大会に出場し活躍。佐沼中３年時は、和道流ワールドカップで優勝。身長181㌢、体重74㌔、血液型Ｂ型。父、母、兄２人、妹の６人家族。尊敬する選手は、2018年空手世界選手権銅メダリストの西村拳選手。

# 日本の頂点へ

## その先には聖地武道館が

— Go for 2020 —

Chiba Ryouki

優勝はできませんでしたが、高校最後の大会で準優勝という結果を残せてうれしいです」と白い歯を見せた。

第73回国民体育大会空手道少年男子個人組手が２０１８年10月７日、福井県敦賀市総合運動公園体育館で開かれた。石川県小松大谷高空手道部所属の千葉は、石川県代表として出場。全国の舞台で、自身初の準優勝に輝いた。

空手との出会いは３歳の時。和道会はさまに所属していた２人の兄の背中を追い、４歳で道場の門をたたいた。千葉が「足を向けて寝られない」と慕う和道会はさまの武川秀和館長は「やんちゃ坊主でしたね。いくら厳しい練習をしても休まず、つらくても最後までやり抜く子でした」と当時を振り返る。努力し続けるひたむきさと、類まれなセンスで小学生の頃から全国大会の常連となった。しかし、目標の日本一には届かず「高校では必ず日本一になる」と空手の名門小松大谷高校への進学を決意した。

高校の練習は予想以上に過酷だった。朝５時に起床し、寮から学校までの10㌔を自転車で通い朝練。放課後も３時間を超える練習の日々が続く。「最初は、先輩たちに気を遣うことばっかりでした」と振り返る。そんな千葉に、中村隆輔監督は「先輩だろうが試合になれば関係ない。遠慮をするな」と助言。吹っ切れた千葉は、めきめきと頭角を現し、監督や仲間たちに認められ、２年の夏からは主将を務めるほどに。「それまで自分のことだけでしたが、主将になったことで周りが見えるようになりました」と自身の成長を実感した。

日本一を胸に臨んだ今年のインターハイは、個人が３回戦進出、団体がベスト16で涙をのんだ。「３年間努力を続け、苦楽を共にしてきた仲間と優勝できなかったことが悔しい」と仲間との最後の大会を回想する。「国体では誰にも負けない」―。同じく国体出場を決めていた太田翔一郎コーチと、二人三脚で特訓に明け暮れた。千葉の課題は後半の集中力。優位に試合を運んでいても、隙を突かれて負けることが多かった。そこで、試合後半の動きを徹底的に繰り返した。練習後も、夜遅くまで自主練習を重ねた。

迎えた国体当日。「全てはこの日のため。ここまで積み重ねてきたことがどこまで通用するかワクワクしました」。質と量、どちらも兼ね備えた練習が自信につながった。千葉は１回戦シードで２回戦から出場。序盤、思わぬ苦戦を強いられたが、冷静に試合を進め勝利した。３回戦は、全国高校選抜大会チャンピオンの梶村幹人（香川県）。公式戦での対戦はないが、練習試合では接戦にはなるものの勝ったことはなかった。「信じる技とスピードを出し切るだけ」。試合開始とともに一気に畳み掛ける。特訓で磨き上げた得意の突きが決まる。最後まで攻める姿勢を貫いた。終わってみれば９対１の圧勝。技とスピードは全国トップレベルだという自信が、確信に変わった瞬間だった。「３回戦を勝ったことで波に乗れた」と続く４回戦、準決勝は危なげなく勝利し、決勝へと駒を進めた。

決勝は、開催地福井県代表の森浩人と対戦。北信越大会では勝利していたが、会場の多くが地元森の応援。完全アウェーでの勝負となった。そのような状況も意に介さず「高校最後の試合。思いきり楽しもう」と試合に集中した。結果は０対３で敗れたが、千葉の目に涙はなかった。「決勝の舞台で力を全て出し切れました。悔いはありません。楽しいひとときでした」と胸を張った。

千葉は４月から国士舘大学に進学する。同大空手道部は、全国優勝の常連で、練習が厳しいことでも有名。「日本一という目標は高校でも果たせませんでしたが、大学では必ず頂点に立ちます。そして、日の丸を胸に日本武道館で開催される東京五輪に出場したい」と目を輝かせる。武川館長は「立派なアスリートに成長していると思います。日本代表も夢ではない」と目を細める。

夢だと語っていた日本一は、手を伸ばせば届くところに。これから先も歩みを止めることはない。その先には２０２０年の日本武道館が待っているはずだ。